

憧れの住む町

秋野 成道

暮れも押し迫った日曜日のことである。朝刊の求人折り込みチラシに、次のような広告が載った。

外国人向け旅館のスタッフ募集

年齢 六十歳以上

勤務 週三日程度働ける方。

条件 お客さんに親切にできる方に限ります。

外国語ができる方歓迎します。経験不問。

時給 1000円。宿泊費が安いので、給料はあまり

多く払えません。賞与が払えるかどうかは、現時

点ではわかりません。

連絡先 花旅館 03-XXXX-XXXX

花旅館は水道橋の商人宿である。この水道橋は江戸時代には旗本屋敷が建ち並んでいた、歴史のある土地柄である。大久保彦左衛門の屋敷跡もすぐ先にある。

花旅館も歴史だけはあった。建てられてすでに百年を超えている。周りは高いビルが建ち並んでいるのに、ここだけは古い写真を切り抜いたかのように、時代の流れとは無関係にたたずんでいた。

かつては「水道橋旅館」が屋号だった。名前が古臭いというので四代目経営者の矢崎昭一が、平成元年の改元にあやかって、妻の名を取って「花旅館」とした。

屋号を変える前から旅館の経営は芳しくなかった。野球観戦の客が来た時代もあったが、球場が建て替えられ、大きなホテルができてからは、JRの線路を越えて三崎町側に客が流れて来ることはなくなった。

屋号を変えても同じだった。東京に長期逗留する商人は、ビジネスホテルを利用するようになった。一時的には、工事現場の労働者が長期に泊ることはあっても、工事が終わると去って行った。数年前までは近くの大学に通信教育学部があった。ゴルフデンウィークや夏のセミナーの際に学生が泊まることもあったが、学部は隣の駅に移ってしまった。コロナウイルスが流行っていた頃は、客は一人も来なかった。

国の旅行支援対策で国内の旅行者が増えても、また、コロナ禍が沈静し海外からの旅行者が増えても、花旅館とは無縁だった。もうこの商売は無理だと夫婦で考

えていた矢先に、矢崎昭一が脳溢血で亡くなったのであった。子供がいないので、妻の矢崎花が旅館の経営を引き継ぐことになった。

一 矢崎花の場合

夫が亡くなって矢崎花は途方に暮れた。もうすぐ七十五歳になる。財産もなく、これといった能があるわけでもない。この先どうしたら良いのかわからなかった。

夫が亡くなって一週間後の朝、証券会社から電話があった。

「矢崎花様ですか。亡くなったご主人が株券を保有されているので、その相続についてご連絡をいたしました」

「あなた振り込め詐欺じゃないの」

「とんでもありません。御宅の場合はお金を出すのではなく受取る方です」

後日担当者が来て、詳しく説明をしてくれた。

夫が持っていたのは、ゲームソフトを作る二部、現在のスタンダード市場に上場している会社の株だった。購入した時一株三百円程度だったが、今は時流に乗って二千円になっていた。この株を三万株持っていた。

夫がなんでこんな株を持っていたのか、花には皆目見当がつかなかった。こつこつと貯金をする人だったが、株式の知識はなかったはずだ。証券会社に勧められて購入したのだろう。

「もしもの時のために、残しておいたのかも知れない」と夫に感謝した。花は株を売却してもらった。手数料や税金を引かれてもかなりの金額が手許に残った。これでこの先なんとか暮らしていける。旅館は閉めようと決心した。

十月初旬のことである。帳場を任せていたGさんが、「外人が来た」と言って、あわてて花のいる社長室兼居間に駆け込んできた。

Gさんの本名は後藤徹である。八十歳を越えた老人である。十年前までは「後藤さん」と呼んでいたが、前歯が抜けてからは「爺さん」と呼ぶようになった。本人には後藤のイニシャルの「G」だと言っておいたので、Gさんは誰にでも、

「Gさんと呼んでくれ」

と言っていた。Gさんはもちろん英語はしゃべれない。何本も歯が抜けているので、日本語でさえ何をし

やべっているのかわからない時がある。そんなGさんが店番をしている時に、外人が突然現れたのである。

これまで花旅館に外人が泊ったことはない。コロナ禍が終息して、海外から以前のように観光客が来ていることはニュースで知っていた。でもまさかここにまで外人が来るとは思ってもいなかった。

双方身振り手振りで話した内容は、凡そ次のようである。

「私たちはこのホテルに滞在することを欲しているのである」

「ここはあなたたちのような外人が宿泊を欲するホテルではないのである」

「私たちは必ずやここでの宿泊に満足するであろう」

「ここはベッドもなく、便所もジャパニーズスタイルの共同なのである」

花は何とかして追いついたかったが、

「私たちは日本のことわざ知っているのである。郷に入れば長い物に巻かれよ。何の問題もないのである」と言っている下がるのであった。

宿の前の看板『一泊朝食付き4500円』の、「4500円」という数字に惹かれて泊る気になったらしい。

「私たちに一週間の滞在を許可して欲しいのである」と何度も懇願するので、花は根気負けして、

「それならツーデイ許可するであろう」と許してしまった。

彼らはオーストラリア人のカップルだった。八畳の和室に通して、しばらくすると二人は夕食を食べに近所の居酒屋に行った。

朝食は、鱈の干物とかまぼこ二切れ、佃煮に味噌汁、

それにご飯である。彼らは「ベリーナイス、とてもおいしいのである」

と言っているうちに食べた。ご飯とみそ汁をお代りした。

日中は観光に出かけて行った。ところがこの日の夕方、彼らは別の外人女性を二人連れて帰って来たのである。浅草見物に出かけた際に知り合ったらしい。彼

女たちが今夜の宿を探していると聞いて、

「私たちは安く清潔な旅館に泊っているのである」と自慢して連れて来たらしい。花は仕方がないので、

「ツーデイOKである」

と言っていることにした。彼らを泊めてみて、案内手間がかからないことがわ

かった。部屋はきれいに使ってくれるし、何よりも人なつっこい。夜になると東京の見所をいろいろ花に尋ねた。花は彼らが持っている地図を広げて、身振り手振りですら何があるかを説明した。Gさんも面白がつて身振り手振りで東京の見所を説明してあげるようになった。結局二組の客は一週間泊って次ぎの目的地に向かった。別れる時に何度も、

「とてもサンキュウである」

と言つて出ていった。

これが、矢崎花が旅館を続ける決心をしたきっかけである。

彼らが言うには、バンコクには彼らのようなバックパッカーと呼ばれる旅行者を泊める安宿がたくさんある。バックパッカーの聖地とまで言われている。花はそういう宿がどのような所なのか見ようと決めた。

期間は十一月初旬から二週間とした。その間は、花旅館は休むことにした。そのことをGさんに言うとき、「俺もここで隠居しようと思つてました」

と告げられた。住み込みで常雇いはGさんだけだった。Gさんに引退されると困るのだが、Gさんの決心は固かった。辞めるきっかけを待っていたらしい。

「檀那が亡くなった時に辞めさせてもらおうと思つてました。奥さん一人なのでしばらく様子を見てたんだ。新しいことを始めるのは結構なことですよ。ただ、俺はここらが潮時と思つてます。長男が自分たちと暮らそうと前から言つてくれているので、息子夫婦のところをやっかいになるつもりです」

Gさんは四十年近く働いてくれたが、花旅館には退職金のような制度はない。夫の株を売った金があったので、Gさんには餞別として五百万円ほど渡した。Gさんは、

「これで息子に顔が立つ」

と言つて涙を流して喜んでくれた。

矢崎花は予定通りバンコクへ向かった。バックパッカーの聖地カオサンのゲストハウスに数軒泊まつてみた。

花が泊まったゲストハウスは、日本の木賃宿のような簡素な宿であったが、狭いながらもどの宿にも宿泊者同士の情報交換ができるスペースがあつた。三々五々人が集まり情報交換をしたり、お喋りを楽しんでいた。時間を気にしない、気さくな人が多かった。

「サイアム・パラゴンで無料のティーパーティーがある」

「ワット・スタットで宗教行事がある」

など、さまざまな情報が掲示版に貼られている。明日見物に行く同行者を募るメモも貼られている。ゲストハウスは旅の情報が得られるだけでなく、友人が増えることが魅力のようであった。

この旅行で彼らがどんな宿を求めているのか、凡その見当はついた。あまり費用は掛けられないが、旅館を多少改修すれば対応できそうに思えた。しかしそれを誰に相談したらよいのか、さらに今後旅館を運営していく上で、誰に手伝ってもらったらよいのか、それが問題であった。

Gさんは既に隠居してしまつた。旅館仲間はほとんどが廃業していた。そこで思い切つて、求人公告を出すことにしたのである。集まつた人たちと相談して、どんな施設したらよいか決めようと思つた。給料もたいして出せそうもないので、若い人は来ないだろうし、若い人は苦手だつた。経験があり、既に引退をしているような人が来てくれたら有難いと思つた。そういう人なら、安心して相談できそうに思えた。とにかく、求人折り返しに広告を掲載することにした。花旅館のある千代田区は配布エリアにないので、近隣の新宿区、中野区、渋谷区を配布場所に選んだ。

それが冒頭の風変わりな広告であつた。

花旅館の求人に応募してきた男女は十人ほどいた。面接をしてみると、金に困つていそうな貧相な男女が数名いた。頼んでもいないのに経営コンサルタントを買つて出る人もいた。ホテルで仕事をした経験がある人もいた。

「何ができますか」

と尋ねたところ、

「管理職ができます」

との答えには啞然としてしまつた。

そんな中で、伊沢文雄と山田誠三、そして近藤咲子は違つていた。花の希望は、開店の準備から運営に至るまで、真摯に相談に乗ってくれる人たちだつた。この三人にはどこか共通した点があつた。それぞれ長い経験があり、未だに満足のゆく仕事をしたいという熱意を持っている。働く条件についても、ほとんど要望を言わないのにも好感が持てた。

一、伊沢文雄の場合

伊沢文雄は現在六十七歳である。妻と二人で暮らし

ている。一人息子は既に家庭を持ち、会社の都合で札幌に勤務している。今年小学校に入学した孫娘とは、夏休みに東京に遊びに来る時にしか会えない。

退職してからは、よくいわれる喪失感のようなものを感じたことはない。退職前から、満員電車から解放されることや、日々の自由な時間に憧れていた。

日課は自宅のある幡ヶ谷近辺を朝夕散歩するだけで、他にこれといった習慣はない。一年経つと曜日感覚がなくなった。カレンダーを見ないと、今日が何曜日かわからなくなった。

時間だけはたっぷりあった。新聞は長い時間をかけて、隅から隅まで、雑誌の広告にまで目を通した。だから日銀の金融政策から、芸能人の密通事件に至るまで、かなり広範囲の情報に精通していた。日曜日には求人チラシにも目を通すことにしていた。

伊沢の知人に、ゴルフが趣味なので、そのためにスーパーで品出しのアルバイトをしている男がいる。

「定年退職した人間に、自分好みの仕事なんかはない。良い運動と割り切って仕事をしている」

と言っていた。

伊沢も何かしてみたい気にはなっていた。しかし、金のかかる趣味もないし、これまでの経験とは無関係

な仕事はしたくなかった。まだ体力も衰えていない。このまま無駄に時間が過ぎてしまうのは惜しいと思つて、焦りを感じることもあった。

そんな時に花旅館の求人広告を見たのであった。年齢が六十歳以上という条件と、お客さんに親切にできる人に限るといふ条件に気持ち引かれた。

「旅館ではどんな仕事をするのだろうか」

夕方の散歩から戻って風呂に入り、いつものように晩酌を始めた。普段は焼酎の水割りを飲んでいるうちに眠くなるのだが、この日は求人広告のことが頭から離れなかった。妻の由美子にそのことを話すと、「気になるのだったら、とりあえず電話だけでもしてみたら」と言われた。

「まあ、とりあえず電話だけでもしてみるか」

伊沢文雄は中規模の旅行会社に勤めていた。支店勤務を経て、資格をとって海外旅行の添乗をするようになった。一九七八年に成田空港が開港されたのがきっかけで、庶民も海外旅行に出かけられる時代になっていた。アメリカ、ヨーロッパの募集旅行は、どんな商品でも売れた。そのため添乗員が不足していた。

添乗に慣れるようになると、極力客の相談や苦情に親切に対応するようにした。帰国後には、はがきの札状を送るようにした。次回のツアーの案内も郵送するようにした。伊沢の添乗するツアーには、リピーター客が多かった。

添乗に合わせて、英語はもちろんフランス語、ドイツ語、中国語も勉強した。語学ができることは、お客に安心感を与えた。ほとんどの添乗員は、片言の英語ができる程度だった。ベンダーといわれる現地のスタッフが仕切ってくれるので、語学ができなくとも添乗は勤まった。

会社も添乗員としての伊沢を高く評価していたが、管理部門の社員の方が昇格は早かった。旅行会社の花形は企画部門である。同期入社で内勤しか経験のない男が、企画部に異動になっていた。

「現場においてどういう商品があったらよいか、教えてくれない」

と聞かれたことがある。人当たりは良いが、出世欲の強い男だった。現場を知らないから、これまでと同じような商品しか作れなかった。バブルの時代になると、新しい商品が求められるようになっていた。価格競争が激しくなつたうえ、海外には何度も行っている

客が増えていた。ありきたりの商品や、中身の薄い商品では、もう完売できなくなっていた。自分の経験をこんな男のために無駄にしたくはなかったので、伊沢は適当にはぐらかして胸に秘めておいた。

入社十年目の春、係長に昇進して企画部へ異動となった。

伊沢にはこれまでの経験で得たノウハウと、添乗で得たリピーター客がいた。彼らが喜んでくれるようなツアーなら、目標の集客はできると思っていた。

募集旅行は宣伝をしないと客が集まらない。ほとんどの旅行会社は、日曜日の朝刊に合同でツアーの広告を載せていた。販売の芳しくない商品は催行できる最低人数が集まるまで、何度も広告を打つ必要があった。ダイレクトメールを送る費用もばかにならなかった。伊沢は自分の企画商品は、広告をしなくとも売れる自信があった。

初めて企画した商品は、「パリ芸術の旅八日間」である。今では当たり前のようだが、当時は斬新だった。旅行好きの人たちは、ありきたりの場所を巡る定番のツアーには見向きもしなくなっていた。

このツアーには伊沢自身が添乗して案内をする。主

な見学場所は、オルセー美術館、ピカソ美術館、オランジュリー美術館、ロダン美術館などである。しかも、カルト・ミュゼというチケットを利用するので、一般の入場者のように並ばずに美術館に入場できる。

食事も趣向を凝らした。例えばオルセー美術館の見学の際は、館内のすばらしいフランス料理のレストランで昼食ができるよう手配した。一時間程度のおざりな見学ではなく、食事を入れて四時間のゆっくりとしたスケジュールにした。現地の代理店とも関係ができていた。こうした関係は、経験のない内勤上がり企画スタッフには持ち得ることができなかった。

パンフレットの制作前に、伊沢は簡単なワープロ印刷の案内を作り、リピーター客に送ってみた。自信があるとはいえ、価格もかなり高額だったので、集客できるかどうかはやはり不安があった。発送した二日後から問い合わせの電話が入り出した。そして、パンフレットが店頭に並ぶ頃には、満席となっていた。予約ができな客から苦情が殺到し、この企画を五本追加して販売した。

経験をもとにした独創的な商品を販売し続けた。「ガウディをめぐるバルセロナ」、「鉄道で廻るドイツ周遊」、「シルクロードを楽しむ旅」などである。

三十五歳で課長に昇進した。管理職になってからは、もつと効率よく利益が上がる商品を企画するように迫られるようになった。しかし、伊沢は客を大衆、マスとして扱った商品は時代遅れだと感じていた。だから上層部からは嫌われた。ほとんどの役員は管理部門上りだった。お客の要望より、会社の利益を優先した。

四十五歳を迎えた年に、新たに設立された子会社の部長として出向した。スタッフは少ないが、手作りの旅行商品を販売する会社だった。伊沢には願ってもないことだった。本社での出世は、とうに諦めていた。

海外旅行は既に個人旅行が主流になっていた。手作りの個人旅行に近い商品を企画し続けたこの会社は、バブル崩壊後の多年の不況で多くの中小旅行会社が倒産したなかで生き残った。六〇歳の定年まで働き、その後は六十五歳まで囑託として働いて退職した。

一年以上ぶらぶらしていた。口にこそ出さないが、夫が終日家について、毎日三食の世話をするのは、妻の由美子にとってはこれまで以上に大変そうであった。そんな時に、花旅館の求人広告を見たのだった。

三 山田誠三の場合

山田誠三は六十九歳である。神田のガード下で営んでいた喫茶店を数年前にたたんだ。住まいは西神田の団地である。夫婦でここに住んで三十年以上になる。今は国民年金の所得しかないが、何とか生活はできた。

千葉県の高校を卒業して東京に出てきた。実家は漁師で兄が家業を継いだ。三男の誠三は、父親からは、「高校を出たら、家を出て職のある東京さ行け」と言われていた。彼はバーテンダーになることに憧

れていた。しかし、コネがないと有名なバーやホテルに就職することは難しかった。仕方なく、学校から推薦されたアラスカという喫茶店で働くことになった。

アラスカは何店かの店舗を持つ、今でいうチェーン店だった。初めは神保町の喫茶店に配属され、ウェーターとしてホールの担当をした。朝番の時は開店前の掃除、遅番の時は閉店後の掃除も担当する。これとい

って刺激はないが、客と接しているのは楽しかった。半年ほどして、キッチンの人手が足りない時には手伝うようになった。コーヒーを作るかモーニングセツ

トのトーストを焼く程度の仕事である。キッチンには皆から南蛮さんと呼ばれる年配の男がいた。南蛮さんは、なんでも戦後しばらくグアムに居たらしい。敗戦で捕虜となったがそのままグアムに残って、米軍の賄いの仕事をした。その時にコーヒーの入れ方を覚えた。「俺のコーヒーは米軍仕込みだ」と言うのが南蛮さんの自慢だった。

この南蛮さんからコーヒーの入れ方を仕込んでもらった。南蛮さんは他人に教えたがらない人だったが、誠三がグアムで戦死した戦友に似ているらしいので気に入られた。三年目に南蛮さんが病気で辞めることになった。それ以降は誠三がキッチンの責任者になった。

モーニングセツトは、トーストとゆで卵にコーヒーのセツトで、どこの店でも同じだった。誠三は店長の了承を得て、トーストを食べ放題にしてみた。多少原価は上がったがそれを上回る売り上げがあった。この成功で誠三は社長賞を受賞した。

何度目かの高度成長の時代に入っていた。アラスカも店舗数を増やしていった。五年目に、誠三は新宿店に移った。

ここではサラリーマンを対象にランチメニューを考えた。専門のコックではないので作れる料理は、カレ

ーライス、スパゲッティ、サンドイッチ程度だったが、これらを日替わりランチとして出してみた。簡単なサラダとコーヒートを付けて三百五十円で販売した。スタートさせみると、評判が良かった。価格が安くサービスが早い。食事の後に別の店にお茶を飲みに行く必要もなく経済的だった。ランチの時間は満席となった。売上げはそれまでの三倍になった。この成功で、誠三は再び社長賞を受賞した。

二年後、前の職場の神保町店の店長に昇格した。二十五歳だった。神保町店でもモーニングやランチをいろいろ工夫して、前の店長の時代よりも大幅に売上げを伸ばした。ここで六年間店長を勤めた。

三十一歳の時に会社を辞めた。小さくてもよいからどうしても自分の店を持ちたかった。これまで貯めた金といくばくかの退職金で、神田のガード下の喫茶店の権利を買った。誠三は接客が好きだった。大もうけをするような野心はなかった。

店は少しずつ常連を増やしていった。昼はランチで混雑したが、なんとか一人でやっていった。退社しても時々アラスカの社長の所には挨拶に行っていた。ある時、社長から見合いを勧められて結婚をした。社長の家に入りする植木屋の娘の幸子であった。幸子は

仕事をすることが嫌いではなかったもので、昼は店に手伝いに来た。売上げも順調に伸びて、二号店を水道橋の駅近くに開店できた。子供も二人授かった。しかし、順調なのはここまでだった。

既に喫茶店は斜陽になっていた。外資系のファストフード店やそれをマネした店が開店するようになった。しゃれたレストランも増えたとし、ファミリーストロンは郊外だけでなく都心にも進出してきた。コーヒードンだけを出す喫茶店はほとんど店をたたんでいった。

経費がかさみ赤字になったので二号店は撤退した。神田店でも常連が減っていた。団塊の世代といわれる人達が常連だったが、彼らは引退していった。若いサラリーマンはファストフード店を利用した。

それでもなんとか店を続けることができた。子供たちは成人しサラリーマンになっていた。継いでもらうような稼業ではなかった。

六十七歳になった時に、ガード下を再開発するので立ち退いて欲しいとの要請を受けた。ぼちぼち潮時だと考えていた矢先だったし、立ち退き料が夫婦二人の老人ホーム入居の費用になりそうな額だったので、店をたたむことに決心した。

店を辞めてからしばらくは、これまでに溜まった息子や三人の孫の写真を整理した。しかしこれが一段落すると、やる事がなくなつた。趣味といつても碁を打つ程度だった。週に一度碁会所に行く以外、外に出ることも少なくなつた。時間が経つのがこんなに遅いとは知らなかつた。曜日を意識するのは碁会所に行く水曜日だけだった。

四〇年近くも喫茶店をやつていたので、常連客と話をするのが楽しみでもあり習慣にもなつていた。今は食事の時に妻と話をする以外会話をする機会がない。碁を打つ時にはほとんど会話をしない。手合わせをする碁敵に、

「そうきたか。その手はお見通しだよ」

とか、

「そりゃ俗手だな」

などと嫌みを言う程度だった。

「このままだと、失語症になつてボケ老人になる」

と不安になつた。

「客商売の仕事があれば、やつてみたい」

とたびたび妻に話すようになっていた。

ハローワークにも行つてみたが、サービスマンの求人

は若い人だけであつた。

これを妹から伝え聞いていた中野区の野方に住む義兄が、花旅館の求人折り込みチラシを郵送してくれたのだった。

四 近藤咲子の場合

近藤咲子は六十一歳、独身である。方南町のマンションで、母とつつましやかな年金暮らしをしている。

母親の富子は多少脚が弱つてきているが、身体的な問題はなかつた。記憶力の低下もない。

咲子に必要な家事以外の時間は、好きな本を読んだ。節約のために本は購入せずに、もっぱら歩いて二十分程の永福図書館に行つて借りた。

今の生活に不満はなかつた。しかしこのままで終つて良いのかだろうかと考えるようになっていた。

近藤咲子の父はまだ子どもの頃に早逝した。看護婦をしていた母一人の手で育つた。成績優秀で高校までは常に学内で首席だった。母に負担をかけたくなかつたので国立大学を目指していたが、学校長の推薦で都内の私立女子大学に入学した。あまり社会的な評価の

高い学校ではなかったが、奨学金制度で入学金も授業料も免除されたので選んだのだった。大学を卒業して、女子高の英語の教師になった。

英語の授業は単調だった。文法の時間になると、かなりの生徒は寝ていたが、仕方がないと思った。

ある時、倫理担当の教員が風邪で休んだので、咲子が替わりに倫理の時間を受け持つことになった。咲子は倫理の科目は好きではなかった。安っぽい人生観を押しつけられるようで嫌いだった。

「私は倫理の教科書に目を通したことがないので、教科書に沿ったお話をすることはできません。以前から読んでいるプラトンを例にとつて、生きるということについて話したいと思います」

「こう前置きをして、『ソクラテスの弁明』から『クリトン』、『パイドン』を通して、ソクラテスが死に至るまでの粗筋を説明した。そして、『クリトン』の一節について話してみた。

「プラトンは『大切なのは、ただ生きることではなく、良く生きることなのだ』と言っています。私自身その答えをまだ持っていません。皆さんのように若い人にとって、このことについて考えることはとても大切な

ことだと思えます」

咲子はやや冷たい感じがするので、生徒からはあまり慕われていなかった。しかし、倫理の時間以後、放課後に生徒が職員室に相談に来るようになった。休日に咲子の家に遊びに来る生徒もいた。

何人かの男と付き合ったが、結婚にいたることはなかった。特に性格がきつい訳でもなく、小柄ではあるが容姿も十人並みより少し良い方だと思っていた。

四十を過ぎて気付いたことがあった。それは子どものころから現実的なことばかりを考えていたので、どこか余裕がないのである。子どももの頃には誰もが持つ、スチュワードスになりたいとか、女医になりたいとかの夢を持つことはなかった。安定した学校の教師になることを考え、その通りになった。

独立心が強く、愛想がない点も男から敬遠された。相手に頼るような態度を見せたことはなかった。お世辞を言ったり、つまらない話でも興味ありげに聞くことができなかった。こうしたことが冷たい印象を相手に与えた。しかし咲子は決して冷淡な人間ではなかった。ただ関心の幅が狭いだけなのであった。無駄に思えることには関心を示さなかった。現実的なことにし

か関心がなかった。これが冷たい印象を与えていた。

五十五歳になった時、校長から呼ばれた。

「ご存じのように年々生徒数が減っています。少子化傾向はこのまま続くので、経営が厳しくなっています。残念ながら教員数も減らさざるを得ないのです。ついでに、現状をご理解いただきたいのです」

と言われた。遠まわしだが、早期退職の勧告だとわかった。生徒数が減りクラス数も減少していた。それに反比例して英語の教師のレベルは高くなっていた。流暢な英語を話せる帰国子女や、英語を母語とする外国人教師も増えていた。もう咲子のような、留学経験もない教師は必要がなくなっていた。

「安定した職業だと考えて教師の道を選んだのに、こんなことになるなんて」

と悔やんだが、勧告を受け入れざるをえなかった。この学校には組合組織はなかった。

早期退職として退職金に上乘せがあり、合計で二千二百万円が支払われた。これは老後の資金として取っておかねばならないので、年金を貰えるまでは学習塾の講師でもするしかないと思った。

退職してしばらくは腹が立ったが、落ち着いて考え

てみると、むしろ残りの時間が長くなったので、これからの有意義に過ごそうと考えるようになった。生活の事ばかりを考えずに、残りを少し充実させてみようと考えた。上乘せ退職金の一部を利用して、学生の時に夢見て諦めた、アメリカへ留学をすることにした。

通常はまず半年ほど現地で英語を学び、英語力の認定後に大学の学部編入される。咲子は学部生になるのではなく、聴講を希望していたので、授業についてゆける語学力があればすぐに聴講が可能らしい。学費を調べると、何故か大学より大学院の方が安い。留学期間も九カ月から二年の範囲で選べる。卒業を目指す訳ではないので、資金面からも九カ月と決めた。授業がスタートする秋までに半年間の余裕がある。半年間で英語力の向上を目指しつつ留学の準備をした。

西海岸の大学院に入学した。入学当初はいろいろと戸惑うことはあったが、一カ月ほどで環境にも学校にも慣れた。授業の内容も凡そ理解できるようになった。

クラスにはさまざまな年齢の、さまざまな国からの留学生がいた。咲子は自分の年齢や日本人であることに何の違和感もなくここで勉強できた。そして、何よりも驚いたことは、彼らが良く勉強をする点だった。

授業が終わると、ほとんどの学生は、夕食の時間以外は図書館か自習室で過ごした。咲子も彼らを見習って、図書館で過ごすことが多かった。六人が共同生活をすすめる学内のドミトリイでは、全員と友達になった。年齢も国籍も違うが、さまざまな話題を話し合うこともあった。時々全員で外食することもあった。

毎日一生懸命に勉強をした。こうして九カ月が過ぎ、希望した講義はほぼ聴講できた。多くの学生は、学費を貯めて再び別の単位を取得するために戻ってくる。咲子はこの九カ月で満足だった。

日本に帰った時には五十七歳になっていた。家から二駅先の駅前の塾に仕事を見つけた。フルタイムではなく、週三日のパートであった。高校受験のための英文法と文章読解、必要な英単語を教えれば良いのでたいした苦労はなかった。そうして三年が過ぎた。

六十歳になると、塾のパートを辞めて年金暮らしを始めた。母も年老いている。一年が過ぎた。

留学中は、さまざまな人達と会うことができた。これまでのことや、将来を語ることがあった。その時からこれまでの自分の生き方が、どこか方向がずれていたような気がし出した。

「残された時間で方向修正ができるのだろうか。この歳でやり直しができるのだろうか」

そう思うと言い知れぬ焦燥感にかられた。

もし機会があつてやり直しが効くなら、まったく違う世界に入つてみたいと思つた。自分の殻を破りたいと思つた。

そんな時に花旅館の広告を見たのだつた。

「まだ、やり直しができるかもしれない」と思つた。

五 四人の同志

矢崎花は三月一日から、伊沢文雄、山田誠三、近藤咲子の三人に来てもらうことにした。まずは、意見を出し合つて、どのような改装をするか決める必要があつた。準備期間中は時給ではなく、月五万円の賃金と交通費の実費を支払うことにした。給料について三人は何の不満も言わなかつた。

矢崎花は三人に花旅館の隅々まで見てもらった。

「私としては、外国の人が安心して安く泊まれる親切的な旅館にしたいと思つています。勿論日本人も受け入れます。希望はそれだけです。皆さんに今のこの旅館

を見てもらって、何が必要なのか三日後に話し合いをしたいと思います」

花は初めて外国人が泊った時の経験と、その後のバンコク滞在の経験も話した。

三人は翌日も翌々日も来て、それぞれが旅館の隅々までチェックした。

三日後、四人は社長室兼居間に集まった。

「皆さんの感想を聞かせていただけますか。この業界に経験が長い伊沢さんの感想からうかがいたいと思います」

「花旅館は歴史を感じさせます。こうした伝統的な日本の旅館に惹かれる外国人が多いのではないのでしょうか」

「手直しするのはどの辺でしょうか」

「個室になつている八畳の部屋は内装をもう少し和風に変え、家族向けにしたらどうでしょうか。残る十畳の二部屋については、多少手を加える必要があると思います。二段ベッドを並べて、ベッドだけが個人の専用スペースになります。男女別にして、一室に二段ベッドを三つ設置できるので六人が泊られます。風呂は今のところ一箇所ですが、男女別にもう一つ増やせませんか。トイレは二カ所あるので、内装や便器を変更

するだけで十分だと思います」

「これまで数社の旅行会社と提携していました。旅行会社や紹介サイトとの提携はどうでしょうか」

「旅行会社にお世話になつていたのに何ですが、旅行会社との提携や、宿を紹介するインターネットのサイトに載せるはやめた方がいいと思います。これまでも旅行会社からの斡旋はほとんどないようですね。提携は解除した方がよいと思います。紹介サイトにも手数料を払う必要があります。社長が希望される外国人が安心して安く泊まれる親切的な旅館の理想から、どんどん離れていってしまう気がします」

「社長だなんて言わずに花さんと呼んでください。でも、旅行会社や紹介サイトと提携しなくてやってゆけるのでしょうか」

「今はインターネットの時代ですから、安心して安く泊まれて、しかも親切な旅館のモットーにして実行すれば、お客さんが情報を発信して、それが次のお客さんと呼んでくれます」

「わかりました。そうします。山田さん、食事についてはどうでしょう」

「社長、じゃなかった、花さんが行かれたバンコクの

朝食はどんなでしたか」

「ゲストハウスでは、朝食を出さないところが多いようでした。そばに旅行者相手のレストランや屋台が朝から開いているので、旅行者は困らないのです。しかしこの近くで朝食を食べられるのは牛井屋さんしかないので、朝食付きにした方が親切に思えるのですが、どうでしょう。花旅館では、これまで焼き魚にかまぼこ、佃煮に味噌汁、ご飯を出していました」

「外国人には案外和食の朝食が喜ばれるかもしれません。日替わりで洋食と和食を交互に出してみるのはどうでしょう。私は洋朝食はできますが、和朝食は経験がありません。でも勉強してみます。長く泊まるお客さんが飽きないように、金を掛けずにできるだけバラエティに富んだ献立を考えてみます」

「これで部屋と食事が決まりました。近藤さん、女性の見地からどうですか」

「私は旅館についての知識が何もないので、素人として気付いた点を申し上げます。旅館の雰囲気は伊沢さんがおっしゃったように、この和風の雰囲気を残すべきだと思います。残念なのは、中庭の手入れがあまりされていないようです。少し手直ししたらどうでしょうか。宿に着いてきれいな庭を見るとホッとさせられま

す」

「俺もそれを感じたよ」

と山田も賛成した。

「内の女房は植木屋の娘なので、女房の兄貴に一度見に来てもらいましょうか」

「ぜひお願いします。近藤さん、他に気付いた点はありますか」

「はい、あまりお金をかけずに、廊下や食堂に和を感じさせるようなものを置いたらどうでしょうか。例えば季節の一輪挿しや、品の良い和風の壁掛けを飾るとか」

「いいわね、それは近藤さんにおまかせします。さて旅館の名前ですが、これを機に変えてもいいかなとも思っています。みなさんのご意見はいかがですか」

「長年やってきた屋号ですから大切になさったらどうでしょうか」

と山田が言った。

「私もそう思います。変に洋風な名前にするよりずっといいと思います」

と伊沢も賛成した。

「私も花旅館が良いと思います」

と近藤も賛成した。

「わかりました。花旅館で続けましょう」

こうして花旅館の概要が決まった。

清掃は全員が担当する。山田誠三は食事や案内を担当、伊沢文雄は宣伝や予約と接客、近藤咲子は予約や受付、案内を担当をする。手の足りない部分は、手の空いた人が助け合うことにした。

三月一杯を改装にあて、四月にオープンする。その間、三人は毎日花旅館に詰めて花と詳細を話し合った。宿泊料金は、一泊朝食付で四千五百円のままにすることをにした。八畳の個室は三名以上利用で一人六千円とした。

三月初旬から改装が始まった。部屋の改装や風呂場、トイレの増改築が主な内容である。風呂場は三、四人が一度に入浴できるものが一箇所だった。この浴室は内装に手を加え、壁に銭湯風にタイルで富士山を画してもらった。これを男性用にする。そして隣接する物置を壊して、ここに女性用の浴室を増設することにした。裏庭に面しているので、ガラス面を大きくとって庭が見えるようにした。更衣室にはドレッサーも設えることにした。

大工はこれまで修理をお願いしていた近所の棟梁に

頼んだ。棟梁もすでに八十歳を超えていた。息子は跡を継がずにサラリーマンになっていた。水回りの改修は費用がかかるが、この仕事が最後になると言って、原価に多少の手間賃のせた額で請け負ってくれた。

山田誠三は、喫茶店時代は常連客が中心だったので世間話が好きだった。しかし、外国人を相手にするのは初めてである。近藤に相談してみた。

「俺は長く喫茶店をやっていたので、話をするのは大好きなんだ。でも、今度は外人でしょう。英語なんぞはからきし駄目なんだ」

「大丈夫です。彼らは自分の国の言葉が通じないのは覚悟しているはずです。身振り手振り、時々知っている英語の単語を交える位でいいんです。こちらの気持ちが分かってもらえれば、それで良いと思います」

「そんなもんかな。でも、安心したよ、そう言われて」
食堂は一箇所だった。十二畳の座敷である。内装は障子を張り替え、壁を塗り直して和式のままにした。洋式にするより、場所が多目的に使える。夜は情報交換の場にするので、和室の方が勝手が良い。この食堂から庭が見えるようになっていた。

庭の手入れは山田の義兄に頼んで、安く仕上げで貰

った。樹木はそのまま残して、全体が枯山水風に見えるように手を加えた。昔造りの広い中庭なので、本格的な枯山水にするには費用が掛かりすぎる。経費を押さえて、要所に寒水石を引き詰めた。寒水は白色なので清楚な石庭の雰囲気が出せる。鹿威しも加えた。女風呂から見える裏庭は竹林の雰囲気を出した。シンプルだが情緒がある庭に生まれ変わった。

近藤咲子は、部屋の飾り付けを担当した。八畳の個室には押入れがある。下段に布団を入れるが、上段はクローゼットに変更してもらった。部屋にはシンプルな座敷机だけを置いた。ここでパソコンを打ったり、女性が化粧をすることもできる。柱には百円ショップで探した木製の一輪挿しを取り付けた。季節の花を生ける。

十畳のドミトリイは、ベッドを覆うカーテンを男性の部屋には濃紺の浴衣地、女性の部屋には朝顔模様の浴衣地で設えた。小さい時から繕い物は自分でしていたので、仕上げるのに苦労はなかった。

「咲子さんは器用ね」

と花から褒められた。

それぞれの部屋は飾り気はあまりないが、清潔な設

えとなった。

伊沢文雄はホームページを作った。インターネットで調べて、結局大手のプロバイダーが提供するシステムを利用するのが一番安全で、短時間で立ち上げられることがわかった。幾つかのタイプがあるが、とりあえず中レベルのものを導入してまずは慣れることにした。さらに上級のレベルにするかどうかは、今後検討すればよい。

インターネットで予約ができることは当たり前になっている。しかし、花旅館は部屋数が少ないので瞬時に返信できるような複雑なシステムにせず、空き状況を掲載してメールで予約の申し込みをもらう。これに対して、伊沢か咲子が翌日返信する。瞬時に予約が完了できない不便さはあるが、これが一番確実に思えた。

ホームページの内容をどうするかは、全員で話し合った。

「まず、どんな旅館なのかを知ってもらいたいわね」

花が口火を開くと、

「安心して安く泊まれる、これを謳いたいですね」

と伊沢が言う。

「写真で施設を紹介する必要があるね。でも素人写真でだいじょうぶかな」
と山田が口にした。

「私が旅行会社にいた時に、パンフレットの写真を安く撮影してくれるカメラマンがいたので連絡をとってみましょう」

伊沢は、海外の人気ホテルのホームページやホテル予約サイトを参考に見たが、どの宿も素晴らしい立地と便利な施設であることが謳われていて、どこか空々しい気がした。むしろ大きな自己宣伝をしないこと、これがこの旅館の目的に合致しているように思えた。

翌日、伊沢の知り合いのカメラマンと連絡がとれてカット数に関係なく一日三万円撮影してくれることになった。撮影は全ての工事が完了する三月二十日に依頼した。

花からの注文は、

「あまり実物と離れたきれいな写真が困ります。実際に来て貰った時にすぐわかるので、あるがままに、できればアットホームな感じが出るのが希望です」

というものであった。カメラマンも希望を了解して、合計で三百カットほど撮影してくれた。これだけあれば、時々写真を入れ替えて、目新しさを出すことがで

きる。

三月二十五日に、数か国語で閲覧できるホームページが完成した。四月一日の開業には間に合ったが、

「五日ほどでお客さんが来てくれるかどうか心配です」

と咲子が言うと、花は、

「そんなに慌てる必要はないのよ。急に満室になったらこつちの応対が十分できませんよ。徐々にお客様が増えた方が態勢も整えやすいのじゃないかしら」

と言った。伊沢も山田も咲子も、なるほどと感心した。花には、やはり長い間の女将の経験で旅館経営の肝心なところがわかっている。

「そうですね。ゆつくりあせらず、まず、花旅館が旅行者に優しい旅館だということを理解してもらえればいいですね」

と伊沢が言う。山田も、

「そう、本当に良いサービスならお客さんは必ず増えるよ」

と賛同した。

新装開業の準備が完了した。

一番目の予約が入ったのは、ホームページが完成し

てから五日後だった。アメリカ人の家族四人の予約だった。四月五日から東京に三泊してその後東北に行く。とメールが来た。どうやら、桜前線を追いかけて北上して名所を観光するらしい。次の予約はフランスの女性二人連れからだった。四月十日からの二泊のドミトリーの予約である。

四月一日、開業の日を迎えた。客はいないが近所の神社の神主を呼んであった。お客さんに満足してもらい評判の良い旅館になること、スタッフが充実した日々を送れることを祈願してもらった。

四月五日、アメリカ人家族は午後三時半に到着した。中年の夫婦と小学校の高学年くらいの兄と低学年と思われる妹の四人である。花が玄関の上がり口に正座し、「ようこそおいでになりました」

とお辞儀をした。アメリカ人家族は、少々驚いた様子で「ごちないお辞儀を返して、父親が、」
「わたしたちはフランクリンでございます」

と日本語であいさつした。

咲子が英語で靴は下駄箱に入れ、逗留中は館内はスリッパを履き、部屋に入る時はスリッパを脱ぐように説明した。逗留の手続きをしてもらい、風呂や食堂を

見せた。食堂から見える枯山水を見た時は、
「とてもビューティフルである」

と全員が声をそろえて驚いた。

風呂の時間、消灯の時間、明日の朝食の説明をして、八畳の部屋に案内した。

フランクリン一家は、シカゴから一時過ぎに成田に到着した。疲れているのと汗ばんでいるので、風呂に入りたいたいと言う。咲子は風呂のお湯を抜かないように注意しておいた。男女別になっているので、父親と息子、母親と娘が一緒に入った。風呂から出て言うには、アメリカでは風呂は一人ずつ入るので、こういう体験は初めてだそうだ。父親が言うには、

「子供と一緒に風呂に入るのは、コミュニケーションがとれてとても良いのである」

ということだった。

夕飯はないので、近所の飲食店のリストを作っておいた。とんかつ屋、居酒屋、回転寿司店、ラーメン屋などを網羅した。彼らは日本語が喋れないので、会話の必要ない回転寿司に行った。食事から戻って来て、「いろいろな寿司が回ってくるので、私たちは驚いたのである。日本語が話せなくても大丈夫だったのである。なによりも値段が安いのが良かったのである」

と大喜びだった。

消灯は十一時だが、長旅で疲れているらしく十時には部屋の灯りが消えた。

花旅館の朝食は七時からである。山田誠三は自転車で通って来られるので、朝早くてもよいのだが、一応七時を建前にした。今日の朝食は、花に教えてもらった和朝食を出した。ご飯、味噌汁、焼き魚、かまぼこ、海苔、納豆である。ご飯のおかわりは自由にできるようにした。

フランクリン一家は六時半には起きて、身支度を済ませていた。疲れていても、正味二日間しか東京にいられないので、食事が済んだらすぐに出かけるらしい。山田の朝食を食べて、

父親が、

「これは建康的で、とても良い朝食である」

と言う。今日は浅草とスカイツリー、上野を見物すると行って八時前に出かけて行った。

二日目の朝食は洋食にした。玉子焼きにウインナ、ミニサラダにパンとコーヒーを出した。銀座、日比谷、渋谷、秋葉原を回ると言って出かけた。

三日目は、仙台への移動なので朝が早かった。基本的には七時に朝食を出す、七時半の新幹線に乗るの

で、六時に朝食を用意した。今日は和食にした。彼らが出発する時には全員が見送った。

こうして無事に第一号のお客を送り出した。

第二号のお客は四月十日に到着した。フランスからの二人連れの女子大生である。宿に着いたのは朝八時だった。料金の安いアジア系の航空会社を利用したので、昨夜はクアラルンプール空港で深夜まで過ごし早朝成田に到着した。チェックインは午後二時からだが、空いているのですぐに部屋に案内した。伊沢はフランス語で館内の説明をした。二日間東京に滞在して関西に行く。だから到着日からぎつしりとスケジュールを詰め込んでいた。今日はまずジブリ美術館に行き、豪徳寺を見物して、新宿に原宿、渋谷を見て回るそうだ。部屋に荷物を置くと、早速見物に出かけて行った。

花旅館の全員がジブリ美術館に行ったことがない。どこにあるのかさえも知らない。豪徳寺に本当に豪徳寺という寺があるとは思っていなかった。

二人が宿に帰ってから、伊沢が彼女たちに今日回った場所について尋ねた。

「ジブリは入場券を手に入れるのが難しいの。何度もチャレンジして今回やっと手に入れることができたの

で日本に來たのよ」

豪徳寺は大きな寺ではないが、願掛けの招き猫がブログで紹介されてから外国人の間で有名になった。数え切れない程の招き猫が飾られている。ここを訪れるのはほとんどが外国人だそう。スマートフォン写真を見せてもらい、花旅館のみんなはこんなところがあるのかと感心してしまった。原宿で土産に買ったTシャツも見せてもらった。その背中には、

「世界一馬鹿」

と印字されていた。

「すてきな文字ね」

と自慢するので、誰も漢字の意味を教えなかった。

翌日は鎌倉に出かけた。東京から近い古都を見たいという。鎌倉なら多少アドバイスできそうだが、ここ数年だれも鎌倉に行つたことがない。咲子は、

「私たち、日本のことを勉強不足ですね」

と言つた。山田も、

「東京に何十年も住みながら、俺なんか東京の田舎っぺなんだな。こんど家内と都内見物に行つて来るよ」

とつぶやいた。

三組目の予約は、ドイツ人のカップルだった。予約は四月十五日から三泊だった。彼らは夕方に到着した。

若いカップルかと想像していたが、初老の夫婦だった。個室が空いているのでそちらに通した。

奥さんはドイツの小さな博物館で学芸員をしていて、日本の博物館を見学に來たそう。特に浮世絵に興味があり、浮世絵のコレクションの多い博物館を巡るのが今回の旅行の目的だった。彼女はかなりの肥満体だが、亭主の方はやせている。こちらは普通の会社員だそう。妻の興味とは別に東京の観光名所を回ると言つていた。それぞれが別行動をするようである。

二人は夕方になると戻り、近所の居酒屋でそれぞれが、どんなところに行つたか報告し合つたらしい。

三日後に京都に向けて出発した。

花はここで反省会を開くことにした。

「三組のお客さんをお迎えしましたが、どうだったでしょうか。何か気付いたことや、反省する点はありませんか」

「まあ、無難にこなしたという感じでしょうか」

と伊沢が言う。

「もう少しお客と話ができればよかつたように思う」

と山田が言った。

「私も、とりあえずお迎えして送り出しただけという

感じです」

と咲子も言う。

「そうですね、初めてのお客さんだから、こちらの応対が十分でなかったのはしようがないとしても、今後どうしたらいいでしょうか」

「外国人は、私達がイメージしているありきたりの場所ではなくて、もっと特殊な場所に行きたいのですね。そうした場所を調べて、交通案内や運賃を載せた簡単なノートを作って、お客さんにいつでも見て貰えるようにしたらどうでしょうか」

と咲子が提案した。

次は伊沢が提案した。

「花旅館では夕食を提供しないので、お客さんのリラックスした夜にコミュニケーションが取れず、もったいない気がしました。夕食が終わった後の時間に、翌日の観光の相談だけでなく何かできないものかと考えています」

「例えばどんなことかしら」

「例えば、私ができることは簡単な日本語教室です。

会社を辞める前の年に、海外に長期滞在することも考えて日本語教師の資格をとりました。結局海外へは行かずじまいですが」

「それは良いですね。ちゃんとした資格を持った人が日本語を教える、これはお客さんも喜ぶと思います。皆さんも何か特技を持つてるのじゃないかしら」

「私は大した特技はないんですけど、子供のころから折り紙が好きでした」

と咲子が言った。

「いいわね。咲子さんは手先が器用ですね。折り紙は外国のお客さんが喜ぶと思うわ。私は長く生きただけでこれといった特技がないのよ。でも若い時に長唄を少しお稽古したことがあるの。長唄を外国人がわかってくれるかしら」

「とんでもない。私が神田に店を出した頃は、帰り道でよく三味の音を聴いたもんです。近頃はそんな風流はなくなってしまった。長唄、いいじゃないですか。外国人は日本の文化に触れて喜ぶと思います」

「山田さんも何か特技があるでしょう」

「俺は何にもないんだよ。好きの横好きで碁をやるけど、これじゃ役に立たないな」

「そんなことないんじゃないかしら。私がアメリカにほんの少し留学していた時に、碁をやるアメリカ人やヨーロッパ人に会ったことがあります。初心者に碁を教えるのは、文化交流としても良いと思います」

と咲子が言った。

「段位は持っているのですか」

「たいしたことはないけど、日本棋院の七段の免状を貰ってる」

「すごい」

と皆が一様に驚いた。

「どの位、お客さんに喜んでもらえるかわからないけど、伊沢さんの日本語教室、咲子さんの折り紙教室、山田さんの囲碁教室、そして私の長唄。やってみましょう」

食堂の掲示版に教室の開催日を掲示した。月曜日は山田の囲碁教室、火曜日は咲子の折り紙教室、水曜日は初歩の日本語教室、木曜日は山田の囲碁教室、金曜日は再度伊沢の日本語教室、土曜日は花の長唄、日曜日は咲子の折り紙教室である。夜八時から一時間程度開催することにした。

伊沢の日本語教室では、初心者用に挨拶やスマートフォンを使った場所の尋ね方を教えた。旅行者向けの語学のテキストには、道の尋ね方や買物の会話が載っているが、これらは実際には役に立たない。日本語で返事をされても、それを理解できないからである。

「こんにちは。わたしはここに行きたいです」

とスマホの地図に載った場所を相手に差し出す。ほとんどの日本人は英語で案内できないので、

「真直ぐ行って、右に曲がる」

と身振り手振りで教えてくれるはずだ。

「ありがとうございます。とても助かりました」

と、感謝の意を表す表現も教えた。

食事の後は、

「ごちそうさまでした。おいしかったです」

と言えば、相手は喜んでくれる。

ほとんどの外国人は促音が上手く発音できずに、

「おいしかたです」

と発音するが、意味は通じる。

お礼の気持ちを表すことは、どの国のことばでも重要である。時々流暢な日本語を話す客もいた。こうした人達には、少しレベルの高い会話を教えた。当日宿泊した客のほとんどが参加した。

咲子の折り紙教室も人気があった。子供だけでなく、年齢に関係なく興味を持ってもらえた。簡単な鶴や亀を折っただけでも

「美しい」

と声が上がった。折り紙が夕食後の客同士の団らん

のきっかけにもなった。

山田の囲碁はあまり興味を示されないうらうと思われたが、予想に反して教えて欲しいという客がいた。

基本ルールを教えて、簡単な詰め碁を解いてもらった。時間があれば、実戦もした。終了後、反省のために対局の始めから並べると、

「すべての手を覚えていいるのか」

「勿論だ。これができないと碁は上達しない」

と答えて、驚かれた。

「花の長唄は、三味線を自ら弾き唄う。まずは「松の緑」や「黒髪」のような短い長唄を披露した。内容を咲子と伊沢が数か国語で紹介した。客の中には三味線に触れて見たいと言う人もいて、弾き方も教えた。

しばらくは満室になることはなく、春のシーズンにはほぼ五割の入りで終わった。勤務時間は状況にあわせて変則的に対応していた。六月に入ると、夏に向けての予約メールが急増しだした。梅雨の終わる七月中旬からは満室となる日が多く、忙しくなった。

伊沢と咲子は、何故予約が急増しているのかを調べてみた。そこで分かったことは、花旅館に宿泊した人たちが、SNSにこの宿が安くて親切だと書き込んで

いたのである。無料の日本語教室や折り紙、囲碁の教室もあり、日本の伝統音楽を観賞する夕べもあると、好意的な経験談が載っていた。日本への旅行を計画している人たちが、その書き込みを見て予約を入れてきたらしい。このことを咲子がミーティングで話すと、「少し不安もありましたが、私たちがやっていることに間違えはないようですね」

と花は喜んだ。

六月までは、客のない日は休みにしていたので時給千円を支払っていた。七月からは月給制にして、月二十万円を支給することになった。伊沢も山田も咲子も、時間にこだわらずに働いた。

六 Gさん戻る

七月下旬の梅雨明けからは忙しくなった。欧米、台湾、シンガポール、タイ、オーストラリアからお客が来た。個人旅行で来日する中国人もいた。日本人の客も逆輸入のように来るがあった。

皆休みは不定期にしか取らず、勤務時間も長時間の日が続いていた。疲れの色が見えてきた。忙しさが続いたところで、花は皆を集めた。

「毎日大勢のお客さんに来ていただくようになって、本当に良かったと思います。たいしたお給料を払っているわけではないので、せめて皆さんにしっかりと休養を取ってもらいたいと思います。これからはどんなに混んでいても、週に二日休んで貰います」

すると、山田は、

「私が自分で商売をしている頃は、休みなんか盆暮れだけだったので今のままでかまいませんよ」

咲子は、

「日中は皆さん外出しているから、その時間に休息が取れます」

と言う。

「伊沢さん、あなたはどうぞ」

と花が尋ねた。

「私は花さんが言うように、しっかりと休んだ方が良いと思います。今はまだ緊張感も充実感もあります。でも、これまでの経験から、疲れてくるとどこか仕事が増になってきます。今後も花旅館が今と同じように満室を続けてゆくには、皆が十分な休養を取って心身共に余裕を持って接客をした方が、長続きするように思えるのです。勤務時間も早番、中番、遅番にきっちり分けて、疲労がたまらないようにしたいですね」

「私もそう思います。休養を十分取るようにしましう。私も週二回休ませてもらいます。それと、言い忘れましたが、新装する前の花旅館で働いてもらっていたGさんが手伝ってくれることになったので、手の足りない部分の手伝いをしてもらえると幸いです」

と花が結んだ。

スケジュール作りは、管理職の経験のある伊沢が担当することになった。花旅館は曜日による繁閑はなかったもので、夜の教室との兼ね合いも考慮して、月曜日・火曜日に伊沢が、火曜日・水曜日に山田が休む。この日の朝食は花が担当する。水曜日と木曜日に咲子が、木曜日と金曜日に花が休むことにした。毎日の勤務時間も作成した。日曜日には有給休暇を使える予備の休暇日にした。月に一回は日曜日に定例ミーティングをする。

七月の下旬にGさんが戻ってきた。Gさんの話では、始めのうちは長男の家族とうまくやっていたし、のんびりもできた。しかし一カ月もすると、何もすることがないので退屈になった。嫁も家族も、自分がいると何となく窮屈そうだった。ある時、花さんに暑中見舞いの電話を入れてみた。

「どうです、商売は」

「順調すぎるほど順調よ。外国人向けの旅館として出
発して良かったと思ってるの。猫の手も借りたいので、
気が向いたら手伝ってくれると助かるわ」

それからは花旅館に戻ろうかと考えるようになった。
Gさんは千葉に住んでいたの、旅館に戻るなら以前
のように住み込みの方がよい。花にそのことを言うと、
「願ってもないことよ。うれしいわ」

と言ってくれた。

長男と嫁には、

「花旅館が繁盛して人出不足なので戻ってくれないか
と頼まれた。ここからでは通えないので住み込みで手
伝いたい」

と言った。家族の気分を害さないように、

「体が続かなくなったら、また世話になるよ。もう少
し以前の仕事でがんばってみたい」

と言つて、長男夫婦の了承を得た。

Gさんの仕事は、番頭から掃除、山田が休みの日の
朝食作り、身振り手振りでの客の案内など、人手の足
りない部分の助っ人一式だった。例えば、夏になるに
したがって雑草が増えた庭の手入れを、Gさんがした。
お客に対しても、言葉は通じなかったが、旅館の仕事
に慣れているので、身振り手振りで希望を理解し、身

振り手振りで説明をした。日本語でさえ不明瞭なのに、
不思議にこれを通じるのであった。Gさんには水曜日
と木曜日に休んでもらうことにした。

七 順風満帆

八月も連日満室となった。噂を聞いて予約なしで来
る客もいたが、断るしかなかった。メールでの予約の
問合せに、満室だと断ることが度重なるようになった。
日曜ミーティングで花がこんなことを言った。

「予約で満室になるのはありがたいけど、断るお客さ
んへの対応も必要じゃないかしら。泊ったお客さんか
らは良い評価をいただいたとしても、泊まれなかった
お客さんから悪評をもらったら元も子もありません」

その時伊沢はこんな話をした。

「私が添乗員をしていた時の話です。ロンドンで一度
本物のアフタヌーンティーを体験したいと思っていま
した。お客さんの自由行動の時間に、リッツホテルに
行ってみました。大きなロビーの奥にティールームが
あり、入口に初老の案内の係がいました。アフタヌー
ンティーをしたいと言うと、残念そうな顔をして、『今
日はご婦人の団体が入っていて満席です。申し訳あり

「ませんがお席のご用意できません」と本当に申し訳なさそうに丁寧に謝られたのです。その断り方に腹を立てるところか、かえってすがすがしい気持ちでした。それ以来そのホテルのファンになりました」

「泊ったお客さんと、泊まれなかったお客さんの評価は、ブログで見る人からすると同等かもしれないね」と咲子がつぶやいた。

「どうしたら良いでしょうか」

花が全員の顔を見わたした。その時、Gさんが、「以前満室になることもあったよ。その時は同業者を紹介したね。逆に相手は満室の時はこちらを紹介してくれた。そういう同業者意識があったもんです。今は、そういうのはなくなってしまったのかな」と発言した。

「とりあえず、紹介できそうな近くの旅館やホテルを探してみたらどうだろうか」

「そうですね。今は近所の同業の組合も無くなっちゃったので、まずはGさんの言うように紹介できそうな所を探しましょう」

伊沢がインターネットで数軒のビジネスホテルを見つけた。花と伊沢と山田が、手空きの時間にどんな宿なのか実際に行ってみた。満室の場合は紹介しても良

い施設かどうかも確認した。

チェーン系のホテルの場合の対応は、迷惑そうだった。ちっけな旅館からなにも紹介をもらわなくてもやっていける、という自尊心のようなものを感じた。

一店舗で経営しているホテルの方が、対応がよかった。結局、紹介できるホテルを二つに絞った。

お盆の時期も連日満室だった。個室には台湾から来た老夫婦が四泊の予定で滞在した。三名から原則にしていたが、年齢的なことを考慮して個室を提供した。劉さんという。夫は日本語が堪能だった。妻は日本語も英語も話せなかった。

到着した翌日、二人は朝食を済ませるとすぐに出かけ夕方に戻って来た。その翌日の午後、劉さんあてに電話がかかってきた。Gさんが電話に出て、劉さんは外出中だと言うと、

「私は神保と言います。王子のマンションの管理人をしております。劉さんから頼まれた山本さんの所在がわかりました。王子の三丁目にあるマンションに住んでいるとお伝えください」

と詳しく住所を伝えてくれた。夕方、劉さんが戻った時にその事を伝えた。

翌日、この日も朝から劉さん夫婦は出かけ、夕方に戻って来た。入浴後、夫婦が食堂の前を通った時に、Gさんは夜の教室の準備をしていた。準備といっても、掃除をして座布団を並べる程度なので、手間はかからなかった。Gさんは二人を見ると、

「お茶でも飲んでいきませんか」

と話かけた。二人は食堂に入り、冷えた麦茶をこちそうされた。

「今日は王子にお出かけになったんですかい」

「そうです、王子へ行ってきました」

「王子にお知り合いでもいらっしやるんですか」

「知り合いという程ではないのですが、お線香をあげに行ってきました」

「そうですか。台湾からわざわざお線香をあげに来てもらって、仏さんも喜んでいるでしょう」

劉さんは一瞬考えるようにして、

「私は今八十七歳です。戦争が終わった時は国民学校の児童でした。日本人との共学です。私の父は日本の大学を卒業して台湾で学校の先生をしていました」

と話し始めた。

劉さん一家は、日本統治時代はかなり裕福な生活を送っていた。しかし日本が戦争に負け、父が公職から

追放されてからは生活が一転した。中国国民党が中国本土から台湾に逃れて、台湾国民政府、略して国府が統治することになった。それからは、本土から移住してきた外省人が幅をきかせるようになった。劉さん一家のように元から台湾に住んでいた人たちは本省人として差別されるようになった。日本統治時代は日本人の低位に、日本の敗戦後は外省人の低位に置かれた。しかも国府の政治は腐敗していた。だから本省人は、

「犬が去って豚が来た」

と言って悪政を憎んだ。

この頃、日本に帰らずに台湾に残った日本人がいた。山本さんという人だった。山本さんは日本の製糖会社の重役で、敗戦後にこの会社为国府に接收された時に引き渡しに立ち会った。国府には、日本統治時代の有力な企業を存続させる知識や手腕を持つ者は皆無だった。だから山本さんは製糖会社の運営を指導するよう、国府から命令された。身の安全は保障されたし、待遇は日本統治時代より悪くなったものの、衣食住には困らなかった。日本に引き揚げた人たちよりもはるかにましな境遇だった。

劉さんの父も山本さんも太極拳が趣味だった。同じ太極拳のグループに所属した関係で、以前からの知り

合いだった。家族ぐるみでも親しく付き合っていた。

山本さんは劉さん一家の苦境を知って、なにかと援助してくれた。山本さん一家も決して裕福ではなかったが、会社の砂糖を闇市に流して、食料に代えたり衣服に代える余得があった。そこから劉さん一家にも援助をした。しかし、二年程して山本さんは日本に追放されることになった。国を牛耳る一族が、めぼしい事業を独占するようになった。山本さんのような日本人はもはや不要とされ、追放された。

「家財を日本に持って帰る訳にはいけないので、これをもって暮らしの足しにしてください」

山本さんはそう言って、家財一式を劉さん一家にゆずって台湾を去った。

今回、劉さんが日本に来たのは、山本さんに礼を言うためだった。山本さんが帰国後、何度か劉さんのお父さんあてに手紙が届いていた。山本さん一家は、王子の親戚をたよって暮らしていることが記されていた。劉さんのお父さんは、死ぬまでに一度山本さんに礼を言いたいと願っていたが、十五年前に亡くなった。山本さんの手紙を大切に保管していたので、その住所をたよりに今回日本を訪ねた。

「山本さんも亡くなっているはずなので、せめてお線

香でもあげたいと思って来ました」

手紙の住所に行ってみると、大きなマンションが建っていた。管理人に聞くと、ここには山本姓の人は居ないと言う。事情を話したところ、親切な管理人らしく会社に電話をしているいろと調べてくれた。その結果をGさんが取り継いだのだった。

山本さんの次男が王子のマンションに住んでいた。長男はすでに亡くなっていたので、次男の新吉さんが跡を継いだ。劉さんが訪ねると、快く迎えてくれた。劉さんとほぼ同じ年齢である。

「わざわざ遠路ありがとうございます。父も墓場の影でさぞ喜んでいと思います」

と言って仏壇の前に案内してくれた。

「もつと早く日本に来たかったです、なかなか事情が許さずに今日になってしまいました。私はまだ小さかったので、山本さんのお父さんのことはうる覚えにしか覚えていませんが、新吉さんやお兄さんの雄一さんと遊んだ記憶があります」

「私もかすかに覚えていますが。台湾での生活は楽しかった思い出が残っていません。日本に戻ってからは、貧乏しました。父ががんばって土地を少しばかり残してくれたので、私はしががないサラリーマンだったので

すが、定年退職後は土地を売ってなんとか生計を立てています」

「それは結構なことです」

こんな話から台湾時代の話に移り、片方が忘れていたことを片方が覚えていて、失われていた記憶が結びついて倍になった。あつと言う間に昼になり、辞退したが昼をご馳走になった。その時出されたビールと日本酒で二人の口はますます滑らかになって、夕方になってしまった。夕食も誘われたが丁重にお断りして花旅館に戻った。

「私達が日本に来たのは、この八月で金婚式を迎えるのでその記念もかねた旅行でした。明日は、少しのんびりと名所を回ってみます」

とGさんに言って部屋に戻った。

この日の教室の後に、Gさんがこの話を皆にすると、花が、

「劉さんは明後日出発でしたね。でしたら明日の晩、金婚式のお祝いの会を企画したらどうかしら」

と言った。山田が、

「最近、アジア・太平洋戦争に関する本を読んでいるのですが、日本は占領地で随分悪いことをしたんですよ。劉さんのような方の話を聞くと少しほっとします

ね。ぜひやりましょう」

と言い、全員が賛成した。

翌日の朝、掲示版に夜七時からささやかな夕餉の会を開くことを掲示した。この日も満室で、総勢で十四名が宿泊していた。料理は山田とGさん、花が担当した。費用をあまりかけずにポリウムのある料理を出すことにした。枝豆、カップ巻き、豚の冷製しゃぶしやぶ、たこ焼きの機械があるのでたこ焼きも用意した。飲み物はビールと日本酒、それに焼酎をベースにしたカクテルとソフトドリンクを用意した。

この日の泊りは、劉さん夫婦に、フランスから来た女性二人組み、アメリカ人のカップル、ドイツ人の男性三人、英国からの女性二人組、シンガポールから来た女性二人組とオーストラリアから来た男性一人の十四名である。花が挨拶をし咲子と伊沢が通訳をした。

「台湾からいらした劉さんご夫妻は、今年金婚式を迎えられたそうです。台湾はかつて日本の被害を受けました。日本人代表と言ってはおこがましいですが、金婚式を期に劉さんがわざわざ日本におこしいただいたお礼に、ささやかな宴会を催しました」

と話した。それを聞くと宿泊客全員が拍手をし、それぞれの国の言葉でお祝いを述べた。劉さんは、

「皆さんありがとう。こんなお祝いをして貰えるとは夢にも思っていませんでした。先ほど女将さんが、日本が台湾に被害を与えたとおっしゃいました。確かに不幸なことが沢山ありました。しかし、今回私達が来日したのは、私たち一家が大変お世話になった日本人の遺影に感謝を捧げるためでした」

と返礼した。

花が、

「全員で劉さんご夫妻を祝して乾杯をしましょう。皆さん日本語でカンパイと言ってください」

と音頭をとってカンパイをした。その後は、全員が打ち解けて、さまざまな事が話題に上った。アジア・太平洋戦争のことについて触れる人もいた。ドイツ人の一人がこんなことを言った。

「ドイツも戦争中は各国でひどいことをしたと教えられています。戦後生まれの私たちも心苦しく思っています。日本人も同じに感じているのですね」

九時まで宴会が続き、劉さん夫婦を始め翌日帰国する人や、関西に向かう人達もいたのでお開きにした。

翌朝、劉さん夫妻はまた来てくれることを約束して帰国した。

劉さんは帰国後にこのことを息子夫婦に話すと、息

子がSNSにこの出来事を投稿した。この投稿への閲覧がなんと三十万以上のアクセスとなった。その翌日から、台湾からの予約が急増した。台湾のお客さんの予約で満室となる日も出た。

また、劉さんだけでなく、当日宿泊していた旅行者も、自分のブログに書いたり口コミサイトに投稿したために、台湾以外からの予約もこれまで以上に増えた。秋のシーズンはもとより、閑散期の二月までほぼ満室となった。猫の手も借りたいほどの繁忙となったが、花の主義で皆が週に二回休むことができた。

開業一周年を迎えようとしていた。花は開業記念日の四月一日は予約を入れないことに決めていた。この日にスタッフと家族でお祝いをするためだった。

夕方五時から祝賀会が開かれた。誰の手も患わせたくないので、料理はすべて外から取り寄せた。この日は、家族も招待したので、伊沢の妻の由美子、山田の妻の幸子、咲子の母の富子も参加した。

「皆さん、一年間ありがとうございました。皆さんのおかげで何とか一年間無事に商売することができました。皆さんの助けがなければこんなに上手くゆくことはありませんでした。Gさん、一番の年長なので乾杯

の音頭を取ってください」

「俺今は新参者です。それでもまあ一番の年寄りという事で乾杯の音頭を取らせてもらいます。これからの花旅館のますますの隆盛と、皆々さんのご健勝を祈念して乾杯といたしましょう。乾杯」

「乾杯」

と一堂が唱和した。

しばらくは料理と酒を楽しんで会話も弾んだ。

伊沢が誰ともなしにこんなことを語った。

「私は前の会社を辞めて、もうこれで終わりかと思っ
ていました。でもここで仕事をさせてもらって、充
実した時間を送っています」

妻の由美子が、

「以前と比べて、毎日生き生きしているみたいです」
と付け加えた。

山田も、

「俺も同じだよ。ここではやりがいを感じている。役
に立っていると思うと自然と力が湧いてくるんだ」

咲子も、

「私も同じです。()でこれまで経験したことのない、
人に喜んでもらえる喜びを感じています」

Gさんは、

「俺も一度はここを辞めたんだけど、戻って来て本当
に良かった」

「皆さんありがとう。本当は私が一番感謝してます。
素人のような女将が、毎日お客さんに喜ばれて、本当
に充実しています。その上、皆さんがここでやりがい
を感じているのでしたら、なおのこと嬉しいです」

そして、

「サプライズという程ではないのですが、利益が出て
いるので、些少ですが賞与を差し上げたいと思います」
と言うと、皆は盛大な拍手を送った。これは、賞与
に対する拍手ではなかった。花旅館が皆の力で、なん
とかここまでやって来られたことに対する、喜びの気
持ちの表れであった。

(続く)